

---

# バグ・バランス

甲崎雄人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バグ・バランス

### 【Nコード】

N3559J

### 【作者名】

甲崎雄人

### 【あらすじ】

不幸な男…神代千秋は不幸ながらも普通の生活を送っていた。しかし、彼の不幸はとうとう超能力者や妖怪などの超常現象の類をも引き寄せ始める。人外の力に千秋はどうやって立ち向かっていくのか！？

## 第一話 ある不幸な男の登校（前書き）

久しぶりの投稿です。

前回の駄作より少しは成長しているといいのですが…。

更新は不定期になると思います。

「読みたい小説更新されてねーよ」そんな時にでも読んでもらえたら幸いです。

ちなみにこれは前作の続きではありません。

ご了承ください。

## 第一話 ある不幸な男の登校

俺は不幸だと思う。物を落としたり自販機に金を食くわれることくらいはいつものことだし、車にひかれそうになることだって月に一回はある。今、生きていることが不思議なくらいだ。あまりにも事故にあうから、命を狙われているということも考えたりした。だけど、運転手は性別も年齢もバラバラだし、金銭面にも不幸の魔の手が及んでいる俺を殺したところでなんのメリットもない。ということとは、俺が『不運』のせいでは事故に遭いやすいのは紛れもない事実になるわけで、となると今までは人を巻き込んだことがないとはいえ、いつ人を巻き込むことになるかわからない。だから、登下校はいつも一人できるようにしている。けっして友達がいらないからではない。

ということ、今日も一人で登校している。できるだけ、他の生徒と鉢合わせしないようにいつも早めに家を出ているため俺が歩く通学路には人っ子一人いない。たまにごみすてをするおばさんにはあつたりはするが挨拶をしすぐに離れるので特に問題はない。ふと上を向けば晴れ渡る空が広がる。空気も澄んでいてとても清々しい朝だ。鳥が気持ち良さそうに飛んでいる。

……ベチャッ

「んの、鳥野郎！気持ち良さそうに糞落くそとすな！」

前言撤回。……最悪の朝だ。飛ぶためにふんを体に溜められないとはいえ、せめて誰もいないところに落としてほしい。

クスクス

誰だ？人の不幸を見て笑っている奴は。そう考えながら笑い声がした方を振り返ると、うちの制服を着た女子がいた。

「……………何笑ってるんない」

「ゴ、ゴメンね。本当に頭の上にピンポイントで鳥のふんを落とされている人を見たの初めてだから」

笑いすぎのためか目尻に浮かんだ涙をぬぐいながらその子が言った。そして、鞆からポケットティッシュをだし俺に渡す。

「ありがと。え〜と、名前なんだっけ？」

頭についたふんを拭きとりながら言う。

「やっぱり、拭いたくらいじゃきれいに落ちないな。学校着いたら頭洗おう。あ〜、ばっちい。」

「え……………。私、神代君と二年連続で同じクラスなのに……………」

その子が目を潤ませる。

「そういえば、何度か話したことがあるような気も……………。特に他人の顔と名前を覚えるのに苦手意識はなかったのだが本当に意識していなかっただけのようだ。ちなみに、神代ってのは俺の姓。名前は千秋。」

「千秋でいいよ。ちょい待てよ。え〜っと……………。さくたしゅん、だっけか？」

確かそんな感じだったはず。多分。きっと。

「……佐久間潤だよ。今日でちゃんと覚えてね。ち、千秋君。」  
惜しい。

キキーツ

俺達が横断歩道にさしかかると同時に車のけたたましいブレーキ音がなり信号無視をした車が俺達に向かって突っ込んできた。またか……。なんて、いつもならそんな事を考える余裕すらある。だが、今回は間が悪いことに佐久間がそばにいた。何か理由をつけてでも佐久間から離れるべきだったか。

「チツ」

俺は舌打ちをすると、佐久間に手を伸ばす。

ゴシヤツ

俺が暴走車の軌道上から出そうと佐久間の腕を掴んだ時だった。

「なん……だ？」

突然、車がまるで何かにぶつかったかのように前方部分が潰れ、止まった。とりあえず、運転手の安否を確かめる。車に近づくとタイヤが溶けた臭いが鼻についた。窓から覗くと乗っていたのは若い男が一人。血の臭いに混じって酒の臭いがする。飲酒運転だろう。

平日の朝なのに飲酒運転とはいいご身分だ。肝心の怪我は、ひどそうだが命に別状はなさそうだ。一応、ブレーキを踏んでいたのが功を奏したようだ。俺は携帯で救急車を呼び、佐久間のところに戻った。

「大丈夫か？」

「うん……。」

返事とは裏腹に座り込んでいる佐久間の顔は青ざめていた。無理もないだろうな。俺は慣れてるけど、事故に遭うことなんて普通は一生に一度あるかないかだろうからな。とりあえず、佐久間に怪我がないのは良かった。だが、やはりもう少し自分の『不幸』に対し警戒するべきか。

「運転手さんは……？」

「とりあえず、息はしている。素人目だが怪我も命に危険があるってほどではなさそうだ。とりあえず、警察サッにいろいろ聞かれるのは面倒だ。立てるか？」

なにせ俺達にも何が起こったのかよくわかっていない。そうなる  
と、事情を説明できない以上警察はご遠慮願いたい。

佐久間に手を貸して立たせると俺は尋ねた。

「どうする？家まで送るか？」

正直、これだけショックなことがあつたら学校に行くのはちよつとキツイだろう。

「ううん、大丈夫。このまま学校に行くよ。」

「そうか。でも、まだ顔色悪いぞ？」

少しは落ち着いたらしく、顔色もほんの少しだが戻ってきてはいた。だが、それでもまだ青ざめている。

「ほら、大丈夫だよ。行こ？」

佐久間は割としっかりとした足取りで少し歩き、こちらに振り返ると笑顔で言う。

その笑顔にはやはり少し無理が見える。よほど、学校を休めない事情でもあるのだろうか。……皆勤賞とか？ そんな間抜けなことを考えながら佐久間のあとを追い、俺も学校に向かって歩きだした。

## 第一話 ある不幸な男の登校（後書き）

良い点、悪い点、ご指摘いただけただけならとても嬉しいです。  
感謝感激雨霞です。

## 第二話 ある不幸な男の放課後

「あゝ、ねむ。」

チャームがなり教師が教室から出ていくと急にまわりが騒がしくなる。

あのあと、俺達はちゃんと遅刻もせず学校に着いた。わりと早めの登校だったからな。学校に着くまでには佐久間の顔色も戻っていた。

「ったく。アイツ授業の時は絶対なにか催眠物質放出してるだろ。そのくせ眠ったらすぐ起こすんだからホントたまつたもんじゃねーな。催眠術師に転職したらいいのに。」

ぶつくさ現社の先生の文句を言いながら教科書を机の中に放り込む。あの先生悪い人ではないとは思うのだが、授業がつまらなさ過ぎる。

「ねえ、ちーちゃん。今日帰りにゲーセン行こうよ。」

声の主はわかるので机の上の消しカスを払い落としながら振り返らずに返事をする。

俺のことを「ちーちゃん」なんて呼ぶ奴はこの世に一人しかいない。それと、俺が貧乏だということは周知の事実なので遊びに行くということは必然的に奢ってもらわなければならないことになる。それだけ、我が家の家計は摺切りすじきいっぱいなのだ。それを知ってなお誘ってくるような奴も一人しかいない。

「お前の奢りだったらいいぜ。てか、『ちーちゃん』言つな。」  
「奢るのはいいけど、別にいいじゃんよ、ちーちゃんぞ。」

この優男っぽいのは神田智春。何故『っぽい』がつくかは後々わかるだろう。コイツのことを紹介するにあたり欠かせないことがある。智春は俺と対極、つまり超幸運の持ち主なのだ。コイツのまわりでは偶然とは思えないほどの幸運な出来事ばかり起こる。それともうひとつ。これは俺が智春と行動をとともにする、いや、できる一つの理由だが、コイツと一緒にいると俺の不幸が智春の幸運で相殺される。コイツに出会えたことは俺の人生で最大かつ唯一の幸運だろう。もちろん相殺だから俺の不幸により智春の幸運も弱まってしまう。もちろん智春もそのことは理解しているし、それでもコイツが俺と一緒にいるのはただ単に気が合うからだろう。

俺は片付けが終わり、鞆を持つ。教室に残っているクラスメイトに挨拶をすると智春と一緒にまだ少し騒がしい教室をあとにする。

「んじゃ、行きますか。」

俺が今、対峙しているのは筋骨隆々の空手家。俺は相手の後ろに回り込むと背後から攻撃を浴びせる。その攻撃で壁まで吹き飛んだ相手にさらなる追撃を浴びせようと俺はモーションに入る。その隙を突き相手は素早く体勢を立て直し、カウンターをかけた。その攻撃をまともに喰らった俺はブラックアウトした……。

「あゝ、クソつ。また負けたアゝ。」

俺の目の前のゲーム画面には『GAME OVER』の文字と倒れているゲームのキャラクターが浮かんでいる。

ここは学校から一番近くのゲームセンター。この辺では一番大きなゲームセンターで音楽ゲームやガンシューティング、レーシングゲームなどゲームの種類も豊富だ。

俺達の学校では下校途中にゲームセンターなどに立ち寄ることは禁止されている。だが、そんなこと知ったこつちやない。校則ごとに縛られる俺ではないのだ。

ちなみに、今は格闘ゲーム所謂『格ゲー』をやっている。

「ちーちゃん、そんなキャラ使うから負けちゃうんだよ。そのキャラ弱いつて有名じゃん。」

智春がゲーム台の向こうから困ったような顔を覗かせて言う。

俺が使っているキャラクターは長靴を履いた猫をモチーフにしたのである。キャラクターだ。リーチが短く一撃一撃も軽い。さらに技をきめたあとにいちいち帽子を被り直したり、長靴の紐を結び直したりするので隙が大きいのだ。まあ、そんな余計なことをするところが好きなのだ。一応、スピードを売りにしているキャラである。

「俺にとっては好きなキャラで勝つということが大事なんだよ。てか、弱いキャラで勝つてこそその漢じゃね？」

「さいですか。」

ハイハイ、と智春が笑いながら受け流す。

コンティニューするために智春からもらった百円 事前に千円札一枚をもらっている を投入しようとして順番待ちをしている人がいないか周りを確認する。すると、入り口付近が騒がしいのに気付いた。

「なーんか騒がしくねーか？」

「ゲーセンが騒がしいのは当たり前だよ。」  
「そりゃ、そーだけどさ……。」

騒ぎの根源を探るべく、入り口付近をよく見てみると柄の悪そうな男二人が女子高生と泣いている小さな子供に絡んでいる。遠巻きに見ている人もおり気にはかけているようだが男達を咎めるほどの勇気を持ち合わせている人はいないらしい。

「子供のやったことですよ！？ぶたなくなっただっていいじゃないですか！」

「んなこと言ってもよ、お嬢ちゃん。この服高かったんだよ。謝るくらいじゃこのシミはどうにもならねえんだよ。お嬢ちゃんがどうにかしてくれんのか！？」

あの男の発言と子供の持っているものから推測するにどうやら子供がアイスクリームを食べながら歩いており、あの二人組のうち一人にぶつかってしまった時にあの服を汚してしまったらしい。女子高生の方はその子供をかばっているようだ。

「どーしてくれんだよ？あぁ！？」

男たちが凄んで女子高生を脅す。

「どーしてって言われても……。」

やれやれ。女子供をいじめて何が楽しいのやら。どうしようもない奴だ。このままじゃ何をやらかすかわからないな。

「智春。女子高生が絡まれてるぞ。」

智春の方に振り向いて言う。

「みたいだね。ちーちゃん助けてあげなよ。ちーちゃんなら一人で  
もいけるでしょ？」

格闘ゲームで俺に勝った智春はまだCPU相手に勝ち続けている  
らしく画面から顔を上げずに返事をする。

「お前も来いつての！」

「えっ、ちよつと待ってあと少してラスボスつてあつあつあ〜！」

智春の悲痛な訴えを無視し、襟首を掴んで引き摺りながら入り口  
へと近づいていった。

近づいてみてわかったが絡まれている女子高生が着ているのはど  
うやらうちの学校の制服のようだ。これは助ける口実にはちょうど  
いい。そう思い俺は口を開こうとした。

「お兄さん達、うちの学校の女の子に何しているのかな？」

だが、最初に口を開いたのは智春だった。口調も優しく顔も笑っ  
てはいるが目が笑っていない。どうやら格闘ゲームを邪魔された鬱  
憤をこいつらで晴らすつもりらしい。元々こういう輩を嫌っている  
ということもあるしな。

そのことに気付かない男達は声をかけられたことにこそ驚いたみ  
たいだが、けっして体格がいいとは言えない智春と俺を見て俺らに  
も凄んできた。

「てめえら何首突っ込んできてくれてんだ？世の中出過ぎたことすると痛い目をみるってこと教えてやるつか？ああ？」

「顔近づけないでくれる？お兄さん息クサイよ？」

そう言っつて智春は指の骨を鳴らしながら顔を近づけてきた鼻ピアスをしている男の髪を掴むとそのまま顔に膝蹴りを叩き込んだ。周りが息を呑んだのがわかった。

「がっ……！？」

これが智春に優男っぽいのが付く理由だ。普段は少なくとも表面上は見た目通り優しいではあるのだが、わりと腹黒い節があり、こういう奴らに対しては容赦しない。あの細身からは想像できないほどの力で叩き潰す。優男と呼ぶには少し過激すぎる。

「お、おい！仲間呼んでこい。早く！」

膝蹴りを喰らった鼻ピアスの男はもう一人のバンダナを着けている男に鼻を抑えながら言った。この光景に呆然としていたバンダナの男も仲間の言葉を聞いて我に返り、走り出した。

「残念だけどこっちも二人いるんだわ。」

俺はそう言いつつ足払いをかける。走り出したところに足払いを喰らったバンダナの男は思い切り地面に顔を打ちつけた。

「みつともねえな。大の男が鼻血垂れ流しながら地面に這い蹲ってんのはよ。」

嘲笑しながら言った俺の挑発に単純なバンダナの男は狙い通り殴

りかかってくる。

「うるせえ!」

顔に向けてのそこそこ体重がのった右ストレート。俺は怒りによって単調になったその拳を避けつつ回転しながら肘あたりを掴み相手の勢いに乗せて前方に体勢を崩させる。前のめりになったところにさらに肘打ちを背中に叩き込み、バンダナの男はまたもや顔面から地面に突っ込むこととなった。

顔を押さえのたうち回るバンダナの男を横目にもう一人はどうなつたかと智春の方を見るとあちらは既に沈んでいた。目は腫れ、鼻は曲がっている。可哀相に。

「ちーちゃん、もうそろそろお暇いとましないと。」

周りの様子を気にしつつ智春が言う。

確かに遠巻きに俺達を見ていた人達のざわめきが少し大きくなっていた。もしかしたら既に警察に通報されているかもしれない。

「んじゃ、ずらかるか。」

倒れている男たちは警察に任せるとして、俺達はゲーム台の傍に置いておいた鞆を掴むと警察が来る前にゲームセンターから離れた。

まだ遊び足りなかった俺達はゲームセンターから離れた所で家には帰らずにしばらくぶらぶらしようと思っていた。

「ったく、まだ智春にリベンジかましてなかったのによ。」

あゝあ、とため息をつく。

「ごめんね。助けてもらっちゃって。」

「まあ、それは別にいいんだけどよ。って、おい！」

最近聞いたことがある智春以外の声とその発言の内容に急いで後ろを振り返ると何故かそこには佐久間がいた。

「いつの間に!？」

「え? 気付いてて助けてくれたんじゃないの?」

困ったような顔で佐久間が言う。

「ちーちゃん、気付いてなかったの?」

「いや、うちの学校の女子だってことは気付いていたんだけどな…」

そう言いながら頬をかく。どうやら先程俺たちがお節介にも助けた女子高生は佐久間だったらしい。それにしても、今日は何かと佐久間に縁があるな。

「そういえば、なんで佐久間さんはあんなところにいたの? ゲーセンに遊びに来たってわけじゃないでしょ?」

「だな。実は不良ちゃんか?」

そう俺らが尋ねると佐久間は慌てて否定する。

「ち、違うよ! はい、千秋君。お弁当箱忘れてたよ。」

そう言つて佐久間は鞆から出した弁当箱を俺に渡す。  
うん、確かに俺の弁当箱だ。

「あゝ、あんがと。何かと悪いな。今度何か奢<sup>わ</sup>つてやるよ。」

朝もポケットティッシュをもらったし、世話になりっぱなしだ。  
今日は迷惑もかけたからな。奢るくらいで代わりになるとは思わ  
ないが、貧乏な俺には最大の誠意だ。

「え？いいよ、いいよ。このくらい大したことないし。」

長めの髪を左右に揺らし佐久間が言う。

「それより、助けてくれたのは嬉しかったけど、いつもあんなこと  
をしているの？」

「あんなことつて？」

少し悲しそうな顔をする佐久間に俺は戸惑いながら聞き返した。

「……いつもああやって喧嘩しているの？」

そのことか、と俺と智春は困ったように顔を見合わせる。

「まあ、していないと言えは嘘になるな。だけど、言い訳にしか  
ならないと思うけど、今までやってきた喧嘩は自衛の域を出てい  
ないつもりだ。」

空はいつの間にか真っ赤に染まり、俺たちの後ろには三人分の影  
が長く長く伸びていた。

「でも、やっぱり他人を傷付けるのはよくないよ……。」

俯きながら佐久間が呟く。

「だけどね、佐久間さん。僕たちだって黙って殴られているわけにはいかないでしょ。」

俺たちの間にしばし沈黙が訪れる。

佐久間の言うことも確かにわかる。間違ってもいないと思う。それだけに俺たちの考えを押し付けることはできないし、そのつもりもない。ただそれは間違っていないだけで正しいということではない。

「まあ、俺たちもこっちから喧嘩ふっかけるなんてことはないから安心しろよ。」

沈黙を破るように俺が気休めにしかならない言葉を吐く。そのことは佐久間もわかっているだろうが、さすがにこれを言及することはなかった。

「そうだよ。うん。」

少し暗くなつた雰囲気を払拭するように佐久間が笑顔を見せた。

「それじゃあ、私はもうそろそろ帰るね。」

「おう、また明日な。」

「またね、佐久間さん。」

夕日の中に映える佐久間の笑顔に釣られて俺も少し笑顔になる。智春はというといつもと変わらぬ笑顔。先ほどの雰囲気でも笑顔だ

ったコイツは相当の猛者だと思っ。

佐久間の背中を見送り、ふと智春が呟いた。

「ねえ、ちーちゃん。」

「ん？」

またぶらぶらと歩き始めた俺たちを自転車が追い抜いていく。

「さっきはちーちゃんに便乗したけどさ、実は僕、割と喧嘩が好きでやってる節があるんだよね。」

「……まあ、それもいいんじゃないか？俺は別に否定はしないよ。」

そして、智春はいつもの笑顔で続ける。

「それでさ、いつかちーちゃんともやってみたいな、なんて考えてたりなんかするんですけども？」

心なしかこちらを向いた智春の笑顔がいつもと違い不気味に見えた。ニコニコというよりはニヤリ、そんな擬態語が似合いそうな笑顔に。

「それは、まあいつか、な……」

智春から目を逸らすとそつ曖昧に答えた。

### 第三話 ある不幸な男の休日

住宅地や繁華街から少し離れた一軒の小さな家。それは家というよりは小屋に近い形をしていた。人の動く気配のないそこで早朝のまだ薄暗い闇の中に光る二つの目。その下には猛禽類を彷彿させる鋭利な嘴がついていた。その生物はそつと家の窓に近寄りその嘴を開いた。

コケコツコー！！

こうして、神代家の一日が始まる。

「のわーっ！！ つと。」

俺は布団から上半身を起こし、大きな伸びとともに声をだす。そのまま布団から這い出すと再度全身を伸ばす。そして、窓に近寄り少しひんやりとした外気を室内に入れた。

「オハヨー、ポチ太。」

外で鳴いていた鶏に声をかけると、そいつは少しこちらの方を向いて主が起きたのを確認したかのように鳴くのを止めた。俺は鳴き終えた鶏にパンの耳を投げ与え、窓を閉める。

この鶏は例の鳥インフルエンザの際に処分されるのを免れた生き残りである。俺が去年の夏に泊り込みのバイトをしていた養鶏場にいた鶏で、逃げていたのを捕まえたところ、処分しそびれたのが見つかるはずということと俺に譲ってくれた。俺と一緒に暮らす以上は幸運の持ち主である必要があるため、こちらとしても処分を免れたその運は好都合だったのだ。

俺は欠伸を噛み殺しながら台所に向かい顔を洗う。神代家には洗面所などという大層な代物は無く、勿論シャワーなんて物も無い。

そんなこのボロ小屋も第二次世界大戦の戦火の中を切り抜けた強運の持ち主である。多少の不便は仕方がないだろう。築百年以上のため勿論トイレもポットン便所だったがさすがに水洗トイレに変えてもらった。

俺は朝食を簡単に済ませて家を出た。今日は休日のため学校に行くわけではない。ともすれば、貧乏人の俺が休日に行ることといえはバイトしかない。

ここでまた問題なのがやはり俺の不運。下手にバイトをすると俺の勤務時間だけ客が全く来ないなんてことに成りかねない。ということ、智春との待ち合わせである。

「よお、待ったか？」

駅の柱にもたれ掛かる智春に声をかける。

「全然。おはよう、ちーちゃん。」

智春が欠伸をしながら返事をする。

俺達が働いているのは駅の近くのファーストフード店だ。智春には付き合ってもらおう形になるが、本人曰く『せめて、娯楽に使う分くらいは自分で稼ぎたいよね』とのこと。ちなみに、智春は株もやっております、規模は小さいが娯楽に使うには十二分過ぎるほど成功しているのでバイトする必要はやっぱりない。

ここでのバイトは午前中までのため、あと30分で終わる。とはいえ、駅前の昼の書き入れ時である。俺達は当然ギリギリまでレジ

に立つことになる。

「いらっしゃいませ〜、ご注文をどうぞ」

効率良く回すためマニュアル通りの台詞を棒読みしつつ、レジに顔を向けてスタンバイ。うん、我ながら態度の悪い店員だ。

「えっと、ハンバーガー二つとポテトと、あとは……」

この忙しい時にチンタラした話し方だ。そんなことを考えながら、確認を取るためにレジから顔をあげる。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？　って佐久間さんじゃあないですか。」

本当に最近縁がある。というか、もしかしたら、今まで意識していなかったからわからなかったただで俺と佐久間は行動範囲が半分被っているのかもしれない。

「え？　千秋君？　ここでバイトしていたんだね。」

あちらも今初めて店員の顔を目を向けたらしく驚きの声をあげる。

「まあな。んな事より注文の続きどうぞ。つつかえているから、早くな。」

こちらから声をかけておいてこんな事を言うのもどうかと思っただが、実際につつかえていたためやむを得ない。

「あ、うん。え〜っと、あとはシェイクお願いします。以上です。」

後ろの行列を見てそのことをわかってくれたらしく佐久間は素直に続けた。が、そこで少し意地悪がしたくなってくる。

「チキンナゲットがお勧めですよ。」

めったにやらないスマイル（¥0）を佐久間に向けながら勧めてみる。

「え？ いや、えと、いいです。」

「チキンナゲットがお勧めですよ。」

いららないと言う佐久間に再度勧める。

「じゃ、じゃあチキンナゲット一つ……。」

俺につつかえていると言われたことを気にする優しい佐久間はすぐに折れた。

「……毎度あり。」

俺はやってから少しその馬鹿らしさに後悔した。ゴメンよ、佐久間。

佐久間に商品を渡し、その後も客を数人捌くといつの間にか30分が過ぎていた。入り口の方を見ると佐久間がちょうど出ていくところ。この前の約束を果たすべく（ついでに今日の詫びも）何か奢ろうと思い、声をかけようとする。しかし、制服を着ているのを出し、着替えてから追いかけても間に合うかな、と思い直す。

「俺と智春上がります!」

「上がりまゝす。」

俺は急いで奥に引つ込み、智春もあとに続く。

「なんで、急いでいるの？　ちーちゃん。」

着替えながら智春が尋ねる。

「佐久間にこの前の奢る約束を果たそうと思ってな。お前も行くだろ？」

「うん、勿論。」

俺たちは急いで着替えると店を出る。

「さてと、佐久間はまだ近くにいるかな？　と。」

辺りを見回すと遠くに佐久間が見えた。だが、休日の駅前ということで人が多く、すぐに見失ってしまいそうだ。ちなみに、俺の視力は両方とも2.0だ。これも日々大して勉強をしなかったおかげだな。

「ギリギリ、だね。」

「だな。だけど、急がないと見失いそうだ。」

俺たちは見失わないうちに佐久間の元へ向かうことにした。そういえば、佐久間は駅前に一人で何をしにきていたのだろうか。このあと、何か予定があるなら奢る計画が台なしだ。まあ、直接確認をしたらすぐわかることか。

俺たちが見失わないように早歩きで追いかけていると、歩く佐久間の前に路地裏から数人の男が出てきた。その男たちは佐久間の前

をふさぐように立つと何か佐久間に話し掛け始める。

その様子を見て、俺は歩調を速めながら智春に尋ねた。

「アイツら、佐久間の友達だと思うか？」

「あの風貌からしてそれは無いと思うよ。それにあのバンダナの人どこかで見たことない？」

「ん〜……。あ！ アイツ、ゲーセンにいた！？」

男たちの中にいたバンダナの男は確かにゲームセンターで俺がぶちのめした奴だった。仕返しをしようなんて考えると、どうも手加減し過ぎたようだ。ということは、差し詰め俺たちにやられた仕返しをしようと俺たちの居場所を探していたということだろうか。それで、偶然見付けた佐久間に居場所を聞き出そうとしているのだろう。

そうこうしているうちに男たちが動きをみせた。男たちは周りの通行人から隠すように佐久間を囲むと路地裏に連れこもうとする。

「んの野郎共っ！」

俺と智春は駆け出そうとするが、人が多いためなかなかスピードがだせない。そうこうしているうちに佐久間はその抵抗も虚しく、男たちと共に路地裏に姿を消した。

「ちーちゃん！！」

智春がそれを見て叫ぶがこちらとて進みづらいのは同じこと。やっと、佐久間たちが消えた路地の前に辿り着くと、佐久間の姿を探すべく覗き込む。

ブオオオ

突如、路地から吹き出る突風に俺たちは中の様子を把握する前に弾き飛ばされた。

「のわっ」「うわっ」

その突風と弾き飛ばされた俺たちにさすがに通行人もこちらを気にし始める。

体勢を立て直し、再度路地裏に近づこうとすると今度は何かが飛び出してきた。佐久間だ。

「おい、佐久間！」

突然出てきた佐久間に驚きつつも声をかける。佐久間は一瞬立ち止まり振り向きかけたがすぐに走り出す。俺はすぐに追いかけてようとしたがに智春が呼び止められた。

「ちょっと、ちーちゃん！ こっち来て！」

路地を覗く智春の傍に行き、路地を覗きこむ。

「なっ！？」

路地では信じられない光景が広がっていた。壁に飛び散る血。倒れる男たち。何人かは意識があるようで呻き声をあげている。俺はそのうちの一人の胸倉を掴みあげる。

「何があつた！？」

男は呻きながら答える。

「うぐつ。お、女をここに引きづりこんで、それである奴らの居場所を吐かせようとしたんだ。そしたら、急に何かに、引っ張られるような感じがして、気付いたら、こ、こうなってるんだ……。」

俺は舌打ちをしながら胸倉を掴む手を離す。地面に落ちグエツと悲鳴をあげる男を無視して智春に声をかける。

「智春、ちょっと俺は佐久間を探してくる。ここは任せていいか？」  
「うん。全員息はしているみたいだから救急車呼んだら僕も佐久間さんを探すよ。」  
「わかった。」

佐久間が飛び出していつてからまだそんなに時間は経っていない。そう遠くまででは行っていないはず。そう思い俺は駆け出そうとする。

「なんだ、これは!？」

声をあげたのは路地の入り口に立つ柄の悪そうな集団の一人。集団の数は十人いないくらいか。恐らく、ここに転がっているコイツらの仲間だろう。

「ったく。何人いやがんだ。」

小声で悪態をつく。どうにか絡まれずに通れないものか。

「!?! てめえら、ニヤつく薄気味悪い野郎とガンたれてる馬鹿面!?! てめえらがやったのか!?!」

やっぱり、無理か。仕方がない。強行突破するしかないようだ。

「誰が馬鹿面だ、コラ。てか、やったのは俺らじゃねーよ。」

そう言いながら一番突破しやすそうなルートを考える。

「この状況で誰がんな事信じるかよ。覚悟しろよ、てめえら。」

男たちは路地に入ってこようとす。マズイな。あの数をこんな狭い所で捌くとなると少し時間がかり過ぎる。

「ガッ!?!」

俺の横を何かが通り抜けたかと思うと、智春がリーダーらしき男に飛び蹴りを喰らわせていた。

「こっちは任せてって言ったでしょ。」

相変わらずいつもの笑顔で智春が言う。頼りになる奴だ。

「おう。んじゃ、任せたぞ。」

智春と拳を軽くぶつけ走り出す。

「おい、お前ら追え!」

リーダーらしき男に言われ、一人が俺のあとを追いかけてよとす。が、横から正確に顎を狙ったパンチを受けて昏倒する。

「悪いけど、君たちは僕の相手をしてもらつよ。」

味方から見たら頼もしく、敵から見たら不気味な笑顔がその前に立ち塞がった。

「はあッ、はあッ」

俺は通行人に聞き込むことでなんとか佐久間を追跡することができていた。女子の足だからすぐに追いつけると思ったが甘かった。

今日のあの光景を見て確信した。佐久間は特殊な力を持っている。科学ではまだ証明できない超能力のようなそんな力を。

にわかには信じがたいではある。しかし、数日前の事故。佐久間がいた手前てまえ気にしていないような素振りを見せたが、あの車を止めた現象のことをずっと考えていた。目の前で信じられないようなことが起こったのだ。誰でも考えずにはいられないだろう。

まず、あの何かにぶつかつたかのような車の潰れ方から目に見えない壁のようなものにぶつかつたと考えた。だが、運転手の安否を確認するために俺は車に近づいたがその際に普通に通れたためそれはないだろう。となれば次は何らかの力が一時的に働いたのだと考えた。この場合、その力を働かせたものがあるということになる。そうすると、車を止めたかつたのは俺と佐久間。運転手も止めたかつたはずだが怪我をしてまで止めようとは考えないだろう。この時点では、佐久間が原因だとは言い切れなかった。俺がもしかしたら無意識に、なんてことも考えられるからだ。しかし、今日の路地の前でのあの突風。今度は俺は危険な状態にいたわけでもないし、どちらかという突風により被害を受けていた。そこで、佐久間がある力を使っていることを確信するに至った。

「ちっ。アイツ泣いていたな……。」

こちらを少し振り向いた時に見えた佐久間の涙を思い出し、こぶしを強く握り締める。

「佐久間優しいからな……。自分が人を傷付けることに耐えられなかったんだろうな。」

俺は人に聞きながら佐久間を追いかけていった結果とうとう佐久間の背中らしきものが角を曲がるのが目に入った。

「佐久間！」

俺は角を曲がり佐久間の名を呼ぶ。その小さな背中はずくずと小さく震えると再び走り出す。

「おい、佐久間！ ちょっと待ってっ！」

佐久間は廃工場がある突当りに差し掛かるとその廃工場に駆け込んでいった。

「ったく。」

俺は入り口の横にある『取り壊し予定 立ち入り禁止』と書いてある看板を横目に見つつその廃工場に入っていた。

#### 第四話 ある不幸な男と暴走少女（前書き）

諸々の事情により更新が遅れたことをお詫び申し上げます。

#### 第四話 ある不幸な男と暴走少女

俺は廃工場に入ると佐久間の姿を探し、辺りを見回す。廃工場の中は昼間にもかかわらず薄暗い。勿論電気など通っているはずもなく窓を塞ぐ板の間から漏れる日光が唯一の明かりだった。壁からは鉄骨が飛び出し、老朽化しているのが素人目に見てもわかる。恐らく、取り壊しは決まったものの随分長い間決行されずに放置されているのではないだろうか。床には元々工場にあった工具類だけでなく不良やホームレスが残っていたのであろう空き缶なども散乱していた。だが、至る所に積もる埃を見る限り今は誰も出入りしていないようだ。埃の上にひとつ残る真新しい足跡を辿り、奥に進めばうずくまる佐久間の姿を見つけることができた。

「……佐久間。」

俺に背を向ける佐久間は小刻みに震え、時折嗚咽を漏らす。

「こっちに、ぐすつ、来ないで。」

佐久間は今にも消えてしまいそうな小さな声で言った。

「私普通じゃないから、ぐすつ。千秋君も近づいたら傷つけちゃうかもしれない……。」

「そんなこと言われてもよ、こんな遠くからじゃ佐久間の言ってることも聞こえづらいつて。」

そう言って俺は一步踏み出す。

「来ないでつてば……！」

カンッ

佐久間が振り返ると同時にそのそばにあった空き缶が俺の足元に飛んでくる。こりゃあ、確かにちよつと危ないな。

「あつ……。」

それを見た佐久間が悲しそうに顔を歪め、再度俺に背を向ける。泣き疲れたのだろうか、いつの間にか佐久間の嗚咽は聞こえなくなっていた。

「私ね、もともとこういう力があつたのはわかつてたの。サイコキネシスっていうのかな。あの物を浮かせられるっていうの。でも、昔はそんなに強かったわけじゃなくて、せいぜい鉛筆とか消しゴムとか持ち上げられる程度だったんだ。だけど、この前の事故のときは車に轢かれるって思ったら急に体が熱くなって。気付いたら車がぺしゃんこになってた。私がやったんだって思うと急に自分が怖くなってきて……。」

そう話す佐久間の背中はとても寂しそうで悲しそうで。元々小さいその背中はさらに小さく見えて、重力にさえ押しつぶされてしまふそうなくらい儚かった。

「力は事故の前に比べると格段に強くなつてた。それだけだったらまだよかったんだけど、私が意識しなくても力が出てくるようになり始めたの。気付いたら物が浮かんでるって感じで。今日だってあんなことするつもりはなかったんだよ？ あんなふうに傷付けるつもりは……。」

佐久間の声だけが存在していたこの空間に静寂が訪れる。

事故のときに顔が異様に青ざめていたのも路地から飛び出してきたときに涙を流してたのも自分がやったということに自覚していたからか。

カラン、カラン

佐久間が俺の方に飛ばしてきた空き缶が不意に転がり始める。佐久間は立ち上がり、ゆっくりとこちらを振り向く。その頬には涙の跡。

「千秋君……。私、もうどうしたらいいかわからないよ……。」

疲れきったような悲しみにくれるようなそんな力のない微笑みを見せる。

ゴオオオ

突如、佐久間を中心につむじ風が吹き荒れ、その風に俺は吹き飛ばされた。

「のわっ」

俺はそのまま転がり続け、何かの機械に頭をぶつけてようやく止まった。痛む頭をさすりながら佐久間の方を見遣る。

「いつて。何すんだよ、佐久間！」

「……。」

風圧に耐えながら佐久間に叫ぶも返事はない。不審に思い、佐久

間をよく見るとトランス状態というのだろうか、目は焦点があつていなく髪は逆立っている。

「ちっ。」

どうやら混乱して力が暴走しているようだ。つむじ風は治まってきたが、佐久間の体が地面から数十センチ浮いているのを見るとまだ暴走は終わっていないようだ。

「とにかく、あいつを止めねーと。」

とりあえず、俺は佐久間の能力の把握を試みることにした。能力の有効範囲や威力は勿論だが、佐久間がサイコネシスと言っただけで本当に話に聞くような能力なのかすらもわからない。

俺はそばに転がっていた空き缶を手に取り、佐久間に向かって投げてみる。俺の手から離れた空き缶はしばらくは順調に佐久間に向かって飛んでいくも佐久間の十数メートル手前で急激に勢いを失うと向きを変え、俺が投げた数倍のスピードでかえってきた。俺はその空き缶に拳を振るい、殴り潰すと呟いた。

「有効距離は捕捉完了っつと。」

次に俺が投げた空き缶に続いて俺のほうに飛んできた物をいなしながら飛んでくるものを見極める。

「空き缶、ペンチ、ペンキ缶に鉄パイプ。釘、金槌……。」

不意に嫌なものが視界に入る。佐久間の近くの柱から飛び出していた鉄骨が少しずつ動き始め、そのまま捻じ切られる。

「……マジかよ。」

捻じ切られた鉄骨は捻じ切られて尖ったほうを俺に向け飛んでくる。とつさに飛んでくる物の中から鉄パイプをキヤッチすると衝撃により腕に走るしびれを無理やり無視し、鉄骨に横から当て方向を僅かに逸らす。

ギツギツギツギツギツギツ

方向を逸らされた鉄骨はそのまま俺の後ろの機械に突き刺さった。

「んなの当たったら死ぬっての。」

俺は冷や汗を流して言う。だが、これでとりあえず大体は威力も把握できた。あとは、能力がどのようなところまで働くかだな。

俺はくの字に曲がった鉄パイプを捨てて機械や柱に身を隠しながら佐久間の能力の有効範囲内まで近づいていく。十数メートルまで近づくと、大きく丈夫そうな機械に身を隠し、機械の陰で佐久間とは反対の方を向いて身構えた。しばらく機械に物がぶつかる音を背後に聞いていたが急にその音が鳴り止む。

「やっぱりか。」

突風が巻き起こりそれに伴い色々な物が飛んでくる。そのことを確認すると飛んでくるものを避けつつ場所の移動を再開する。

佐久間の能力の有効範囲外に出ると気配と足音を極力消し、俺の移動が視界でも確認できないように遮蔽物の陰から陰へと移動する。物がぶつかる音はしばらく追ってきたがだんだん的外れな方へと移っていく。完全に後を追ってこなくなったことを確認すると遮蔽物から顔を覗かせる。佐久間の体は向こう側を向いているのを見て取

ると途中で拾ったスパナを佐久間に向かって投げる。佐久間の能力の有効範囲と想定される辺りまでスパナが飛ぶと佐久間は急にこちらを振り返った。向きを変えたスパナを柱の陰でやり過ごし佐久間の能力について頭の中で整理する。

「こんなもんかな。」

佐久間の能力は話に聞くサイコキネシスと大して相違はないようだ。力が働く有効範囲は約十五メートル。その力は鉄骨を捻じ切るほどで、視界に入っていないものを動かすことも可能。だが、見えないものを動かすときは大体でしか動かせない。だから、俺が能力の範囲内で姿を隠していた時は物を直接飛ばしはせずに空気を動かして風を起こし、それによって物を動かした。あと、佐久間の能力の有効範囲内では全てがあいつの手足と化す。これにより能力の有効範囲であれば物の動きを感知することができる。しかしさすがに静止したもので居場所を感知することはできないらしい。俺が佐久間の能力の有効範囲内でも無事でいられたのもそのおかげだろう。俺は能力について整理し終わると対策を練り始める。勿論この間物陰から物陰に移動したり、飛んでくるものをいなしたりすることも平行して行っている。しばらく佐久間の攻撃を眺めながら考えていると漸く対策を思いついた。

「ふうつ。」

物陰に隠れ少しの間気持ち落ち着かせる。顔を両手でパンツと叩き、気合を入れた。

「よし、やるか！」

この闘いでへまをすることは許されない。俺が大怪我をすれば、

佐久間が我に返ったときあいつが傷付くだろう。俺が怪我することと佐久間を傷付けることは同じ意味を成す。そのことを頭の中で再確認し、準備に移る。

「オラ、佐久間。来いよ、コラ！」

俺は佐久間の能力の有効範囲から近過ぎず、かといって佐久間が近寄ってくるほどは遠くない位置に立つと佐久間を挑発する。その挑発が効いたのか、はたまたただ攻撃してきたのか、佐久間は色々な物を飛ばしてくる。その飛んでくる物をかわしたり、いなしたりして壁のコンクリートを削り、地面や機械に積もった埃を舞い上げらせる。

「オラオラ！どンドン来いやア！」

俺は佐久間の攻撃をかわし、いなし続ける。充分に埃や塵が舞い上がっていると俺は有効範囲のちょうど境目にある二台の機械の間に滑りこむ。ここで取り出したるは中に入ったガスを気化させ着火することによって火を熾す不思議な道具、その名も「ライター」×2。一本目のライターを先程まで俺がいた（向こう側が見えないほど埃や塵が舞い上がっている）ところに投げつけると割れたライターからは液化石油ガスが流れ出す。

「このくらいで足りるかな」と

二本目のライターを着火した状態で先程一本目のライターを投げた場所に抛る。ライターの火は気化したガスに引火し、火力を上げる。その火が佐久間が攻撃したことによって舞い上がった埃やコンクリートが削れた塵に引火する。連鎖的に埃や塵に引火することに小さなライターの火は大きな爆発へと化した。

「喰らえい、ダスト・エクスプロージョン粉塵爆発!!!」

当然佐久間はその身を守るためその能力を行使して爆風の無力化を図る。そう、俺はその『無力化』が狙いだっただ。俺は身を隠すこの二台の機械が飛ばないことを願いつつ、爆風と暴風を耐える。そして、何とか立てるくらいには風が弱くなった頃合を見計らって走り出す。

転がるものを踏みつけ、前を阻む機械を飛び越える。とにかく、まっすぐ。飛んでくるものを殴り弾き、ぶつかる衝撃に耐え凌ぐ。とにかく、まっすぐ。我武者羅がむしゃらに走りやっとなんだ佐久間の手。

「失礼すんぜ!!!」

掴んだ佐久間の手を引っ張り、体を引き寄せ掬い上げる。横抱き、俗に言うお姫様抱っこの状態に佐久間を抱き上げる。そして、……回った。

「オラオラオラオラオラオラオラ」

回る回る。爆風を無力化しきり、俺を引き剥がすことに標的を変えた佐久間の能力が起こすつむじ風をも味方にし、回る回る。

「オラオラオラオラオラ、うっぷ……。」

俺が完全に目を回し、吐き気に負けて回転するのを止めたころには佐久間の起こすつむじ風は吹き止み、俺の腕の中の佐久間も元に戻っていた。

「うっん。は、吐きそう……。」

意識を取り戻した佐久間はそう言い、口元を押さえる。

「馬鹿、俺に向かって吐くなよ。」

佐久間が吐く前に急いで佐久間を降ろす。降ろされた佐久間はそばにしゃがみながら俺に問いかけた。

「……どうやって、私を止めたの？」

佐久間が向ける背中にまだ壁を感じながらも俺は答える。

「大したことじゃねーよ。人間の脳から指令を出す以上サイコキネシスだって手足とそう変わらないからな。回して三半規管を狂わせれば平衡感覚を失う。そしたら、サイコキネシスもうまく使えないじゃねーかと思ってよ。」

しゃがむ佐久間の頭に手を置き、続ける。

「ほらな？ サイコキネシスが使えるからってほかの人間と大して変わらねーだろ？」

佐久間は俺の手を払い落としこちらを振り向くと悲痛な面持ちで叫ぶ。

「でも、私は……！」

パラパラ

天井から何かが落ちてくるのに気づき、俺は上を見上げる。天井

を見ればそこには大きな罅<sup>ひび</sup>。周りを見渡すと壁にも罅<sup>ひび</sup>が入り、今にも崩れ落ちそうだ。

「くそっ！ マズい！」

老朽化した建物、佐久間の暴走、俺の起こした爆発。想定はできていたことだった。だから爆発も最小限に抑えたつもりだったが、粉塵爆発など勿論起こしたこともなく加減ができなかったのも事実。脱出路を探すもここはこの廃工場のちょうど真ん中。窓も入ってきた入り口も遠すぎる。

とにかく、佐久間の手をとり近くの窓に向かって走り出す。だが、無情にも建物は崩壊を始める。走る二人の上にも瓦礫が落ちてきた……。

柔らかな感触。温かなぬくもり。それらを頬で感じながら俺の意識は覚醒し始める。少し冷たい風と仄かに香る草の匂いに疑問を感じ目を開けた。目の前に広がるのは薄暗くなった公園。首を回すと少し大きめの胸の膨らみの向こうに見える佐久間の顔。

「起きた？ 千秋君。」

「うわっ」

覚醒しきつた頭は瞬時に状況を把握し、俺は起き上がった。そんな俺に驚きながらも佐久間は微笑みかける。

「大変だったんだよ？ 集まってくる人に見つからないように千秋君をここまで運んでくるの。結構軽かったからよかったけどね。」

その言葉に廃工場でのことを思い出す。そうか、俺は気絶したのか。情けない。

「佐久間がサイコネシスで助けてくれたのか？」

俺がそう問いかけると佐久間の顔に影が差す。

「……うん。ごめんね、千秋君。私、人を傷付けてばかりだよ。」

静かな公園には日が暮れた公園に俺たち以外に人影はなく、虫が鳴くのみだった。

「そんなことないだろ？ 実際に俺は助けられたばかりじゃねーか。」

「でも……。」

「でももくそもない！」

俺は立ち上がると佐久間の頭をわしゃわしゃとかき回す。

「そんなに気にすんなよ。もし、暴走しても俺がまた止めてやるって。な？」

佐久間を安心させるようにニカッと俺は笑う。

「千秋君……。」

佐久間は俺の顔を見上げ、またすぐに俯く。

「うん、わかった。ありがとう。」

お礼を言う佐久間が再度上げた顔はこれ以上ないほどの笑顔だった。その笑顔に安心した俺は佐久間に手を差し伸べる。

「んじゃ、帰るか!」

「うん!」

明るい月が照らす夜道に伸びる二人の影はどことなく以前より少し近づいているようだった。

第四話 ある不幸な男と暴走少女（後書き）

悲しかな

データも消え去り

通り雨

遅れた理由はこれだけではありませんが……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3559j/>

---

バグ・バランス

2010年10月9日03時28分発行